

室内の植物・神の眼差し

主任司祭 小池亮太

冬を迎えた東京では新型コロナウイルスの感染が拡大したとの声も聞かれました。年末には「爆発的な感染が拡大した」との声も聞かれました。そして、年明けには一日の新規感染者数が報告されただけで二千四百人を超え、ついに緊急事態宣言が再発令されました。

東京に冬が来る前に、外に置いていた観葉植物を部屋に入れました。亜熱帯原産の植物は、寒さで枯れてしまったり、枯れはしなくても調子を崩してうまく生長できなくなるからです。しかし、「部屋に入れてしまえば、もう大丈夫。」というわけでもありません。

休眠している時に土が常に湿っていると根腐れを起こしますが、乾燥し過ぎも根に良くないので、水やりに気をつけなければなりません。また、暖房を点けたり消したりすることで起きる室温の急激な変化にも注意が必要です。さらに、植物には日光が必要ですが、室内に陽当たりの良い場所は多くはありません。そして、風通しが悪く、空気が乾燥していると、カイガラムシやハダニなどの

害虫が発生します。このように

〈水〉〈光〉〈風〉〈温度〉〈湿度〉〈害虫〉など、部屋に入れた植物をいつも注意深く見つけている必要があります。

春が来るまで部屋に取り込まれた植物と同じように、医療崩壊を防ぐため、自分自身と大切な人の命を守るために、さまざまなことを犠牲にしても家に留まることを選んだ人も気がつけなければならぬことが多くあります。

外出が減ることで運動不足になり、筋力が低下して日常生活に支障が出てくる場合があります。また、代謝が落ちることや、疲労を感じやすくなったり、肥りやすくなります。

また、はっきりした理由もなくイライラして暴飲暴食をしたり、不眠症になったり、買い物をするので紛らわせようとしたりすることもあります。他にも、人と会って話しをし、食事を一緒にできないことで孤独感に苛まれ、無気力になってしまふことがあります。ミサが中止されて、神のこぼれを共に聞き、御聖体という一つのパンを皆で分かち合うことができなくなり、人との繋がり、神と

のと繋がりを実感できず、心が満たされないことで、その寂しさはより一層深まります。

室内の植物のために〈水〉〈風〉〈光〉〈温度〉〈湿度〉に気を付け、〈害虫〉に注意するように、家に留まることを選んだ人も〈食事〉〈運動〉〈睡眠〉に気をつけ、〈食欲〉〈物欲〉に注意し、〈孤独〉〈心の飢え渇き〉に耐える必要があります。

鉛色の雲が冬の空を覆うように、新型コロナウイルスに覆われてしまったこの世界にあって、自ら家に留まることを選んだ時、今までの当たり前の日々が絶えることなく〈神の眼差し〉が注がれていたこと、〈風〉のような〈神の息吹〉、〈水〉や〈光〉のような〈神の愛〉、

〈温度〉や〈湿度〉のような〈神のあわれみ〉が満ちていたことに改めて気がついた…透きとおるような青空から暖かい陽の光が降り注いでいた前日とうって変わり、冷たい風が吹き、どんよりした空から舞い降りてくる雪が垣根の上や家の屋根に積もっていくのを、少しでも陽が当たるようにと窓際に置いた観葉植物たちのそばに立って眺めながら、このようなことを考えていたのです。